

Title	横濱市矢上古墳調査概報
Sub Title	
Author	柴田, 常恵(Shibata, Joe)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.103(267)- 109(273)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 横濱市矢上古墳調査概報

柴田 常 惠

## 位 置

昭和十一年十月八日のことである。日吉臺の慶應義塾豫科へ赴いた歸途、本年四月に到り横濱市に編入せられて、神奈川區日吉町と改稱するに到つた本塾より北方へ約五百米の舊日吉村大字矢上字谷戸附近の丘陵地を三田史學會の間崎・松本（信廣）兩教授に陪し、保坂は學生西岡秀雄と散歩した處、偶々其一部に鹿島組に依つて行はるゝ土取工事の着手せらるゝを見た。該丘陵は多摩川の舊河床に沿ひ西北より東南に向つて奔れるものゝ一で、古くは河水が直に其脚底を洗ひしものと思

はれるから、北側は急峻なる斜面を呈して今は河床に依つて造られた一帶の平地に連なるが、反対の南側は傾斜緩かである。東横電車の線路は該丘陵末端に近き個處に於て交叉してをるが、線路は丘の陵を低く切取つて敷設せられた爲尖端の一部分が離れて反対側に残存し丘陵の舊態を示してゐる。

土取工事の個處は電車線路より僅に約三十米を隔つるに過ぎず、東京方面より進めば右手に當つて車窓より直に觸目すべきもので、工事着手以前には雑木林の山林となつてゐた爲、左程に注意さるゝ程のものではなかつたが、樹木が總て伐採せ

られて赤裸々の地貌を示せるに及び、丘陵の尖端に當り其頂上が恰も椀を伏せしが如き状態を呈し、心あるものには古墳たる事の注意を惹くに到らしめた。立寄つて之を踏査するに丘陵は此の部分で幅約一五〇米を有するが、大部分は耕されて畑地と爲つてをる。北方の低地よりは高さ約三〇米を有することゝ、頗る展望に富み、多摩川を隔て、蒲田方面の臺地と相對し、田園調布に在る前方後圓の大古墳龜甲山を遙に望むに足り、東方は煤煙常に罩めたる川崎の工業都市を一望に收め實に景觀の勝れたるものがある。

土取工事は既に進んで頂上部を東南側より鋤を入るゝに到つてゐたが、其切面を見れば明白に自然の土層ならずして盛土たることを示して居り、何等の古墳に關する傳説等を有せぬが其の附近には埴輪圓筒の斷片二三の散在するなど、愈々古墳たる事を肯定せしめた。併し其の封土と見らるゝ

部分には二三個處の不自然なる穴を掘つた痕があり、或は既に之れを發掘せる事ありしやとの疑念を挿む餘地を存し、殊に北西に接して稻荷の小祠も祀られて居るなど頗る疑ふに足るものもあつたが、また一方より考ふれば此等の不自然なる穴は根株を掘る爲とも解され、また其儘に放置すれば心なき土工の鋤犁に無殘なる破壊を蒙り、日ならずして全く湮滅に歸することは明白であつた。既に日吉臺の豫科構内に在る遺蹟に就ては夫々調査の試みられて居る上に、此古墳は地理的關係に於ても極めて接近してをるのみならず、多摩川右岸の古代文化相を見る上に相關聯して價值あるものなるため、心なき湮煙を拱手して待つ可きでない。ここに於て間崎・松本兩教授の斡旋に依り關係方面の承認を得、三田史學會に於て調査を行ふことと爲つたのは約十日後であつた。

## 調査經過

關係方面の諒解を得るに到つたから、十月十四日に及び松本教授と共に西岡秀雄君に依つて古墳の實測が行はれた。封土の高さは三米、東西の徑二三・五米、南北の徑二一・五米を有し、自然の丘陵を利用し其の頂上に營める比較的小形の圓型墳である。實際の發掘調査は引續き十五・十六兩日に互り間崎・兩松本の教授を始め三田史學會の會員有志は多數參集し、親しく調査に當らるゝもあり、また見學さるゝもあつた。

發掘的調査に着手するに當り、本古墳は既に云ふ如く土取工事の爲東南隅の部分は深く地盤の地層削立して取去られ完全に封土の切面を示して居たから、墳丘の部分が如何にも明白に人工に依つて築かるゝものたるを示して居た。工事の關係もあり、實際の調査上の便宜も此東南部より着手す

るを便利と思つたから、此の部分より封土の中心に向つて幅約一・五〇米の縦溝を階段式に造らしめた。然るに墳頂より約五米を隔て、深度一米許の地點に於て埴輪圓筒の相當多數に埋没するものがあつた。何れも小破片に過ぎずして、接合し得るは一も見當らなかつた。また土師器・石器等の斷片は縦溝掘鑿の作業進捗に連れて絶えず出土し、其數は相當多きに達したが、須惠器に到つては僅か小破片一個を得たるのみに過ぎぬ。此等は何れも封土築造に當り偶々土壤に交つて運ばれしもので、單に斯かる遺品の散在せる土壤を以て築造せしを物語るに過ぎず、直接に古墳とは關係を有するものでない。

斯くて縦溝掘鑿の作業が漸く進んで封土の中心部に近づくや、封土は整然たる層狀を示して未だ嘗つて攪亂の厄に遭はざることが肯かれて、一同は大いに緊張するに到つた。斯くて墳頂へ一・四

五米に達するや、深度一・四五米の地點に於て一土工の鋤犁に鐵製品の何物かが當りしより、刀の存在を考慮し、其の周圍を廣く掘鑿せしめ、保坂は竹篋を使用して慎重に調査を試みるや、果して一振の劔が略ぼ東西の位置に横はり、劔身を東方に向くるを確めた。此鐵劔の北側に接して銅鏡二面が南北に並び、何れも鏡面を上にして置かれ居り、多數の玉類は此二面の鏡の上に存すると共に、其周圍にも密接して存することが確かめられた。更に注目すべき事實は南方に在りし鏡の略中央に竹製の櫛一枚が密着して存在することであつた。此等の遺物の存在する範圍を確める爲相當の時間を要したので、既に日没に及んで暮色蒼然として調査の便を缺くに到りしたため、櫛の存否を明かにするを得なかつた。遺憾に耐えざるも、此儘に遺物の取上げを明日に延ばし難きものあれば、出來得る限り出土状態のまま、附近の土壤をも併せて木

箱にとり上げて當日の調査を打切つたのである。

翌十六日は前日調査せし部分を詳細に點檢し、櫛の存在を確める爲遺物の出土せし附近の發掘地域を擴大せしめた。然るに小さき塊狀を爲せる灰白色の粘土を存し、斷續すれども大體に於て水平に位置して、しかも矩形をなして存在するのを認めた。此の粘土に依つて區劃されたる矩形の底部に在る土壤は、他の封土に比しては特異の堅さを示し人爲的に敲き堅めたものである事が明白であつた。此等の事實と遺物の出土状態とを考へ合はすれば、遺品の徵すべきものなしと雖も、思ふに櫛がこの矩形の範圍内に存在せしものと解すべきであり、而してこの部分の廣さは東西二・二五—二・三七米、南北〇・六六米で、高さは〇・一七—〇・二〇米であつた。

次いで封土築造の状態を見る爲、墳頂より正南に向ひ、基礎地盤のローム層に到る迄長さ約一一

米の縦斷を試みたが、腐蝕土層は反つて封土直下の部分が隣接する畑地に比して二十糎程高さことが知られた。かくて第二日目も日没となつたので此處に本古墳の調査を終了することにした。

以下本古墳に就て墳形・埴輪・槨・遺骸其他遺物の概要を述べる。

## 墳形

前述した如く本古墳の封土の一部は立木の根を掘取つたと思はる、穴が穿たれて居り、東南隅の一部は既に土取工事が行はれて居たから封土の原形を損するものがあつた。封土の表面は小笹の茂生する所であつたが、葺石を置きし痕跡全く存せず、周圍に繞らす環溝に就ては南面の畑地に及んで掘鑿を試み、基礎地盤に達せしめたるも、其存在を認むべきものが無かつた。丘陵の尖端に於ける自然の高地を利用して築ける古墳のこととて、環

溝を營むに到らなかつたのは寧ろ當然であらう。

## 埴輪

埴輪・圓筒の小斷片は三四十片を出土したるも、完形を存するもの、存せざるは勿論全形を復原し得る程度のものもなく、封土の中腹部に比較的多きを覺えたがすべて散亂状態を呈して居た。

## 槨

前述せる如く、稀少ながら灰白色の粘土によつて區劃せられたる部分は明らかに他と區別し得たるを以て、この粘土は槨の輪廓を示すものと考へられる。されば此粘土を以て直ちに槨とは云ひ難きも、何等かの槨が此處に置かれたことが推察され恐らく木製なりしものと思はれる。槨の大きさは東西二・二五——二・三七米、南北〇・六六米で高さは〇・一七〇——二〇米で、漸く一人の遺

骸を納むる程度である。

### 遺 骸

遺骸を徴するに足るものとしては南方にあつた鏡面に接して、僅かに二箇の齒冠と極めて小さき骨片一個を出だし、北方にあつた鏡面には數條の毛髮の銹着して其の痕跡を留むるものがあつたに過ぎぬ。

### 鏡

二面共に同一の鑄型に依つて製作されたと思はるゝもので、其質また同じ白銅である。文様は鬘龍鏡と稱せらるゝものに屬し、直徑二〇・六耗、鏡面の反り二耗。其の文様は鮮明なるも鈍重を免れず、規格亂れて支那のものにあり得可からざる所で本邦に於ける倣製鏡と解される。青色の鍍は鏡面に多く、背面にも之れを存するが、之れが爲に文

様を被ふに到らず、また北側に在りしものは龜裂を生ぜるも保存状態は佳良なものと云へる。而して南側の鏡面上には櫛を、北側なるには毛髮の銹化して附着し、玉類は兩面の上及び附近にあつた。

### 玉 類

勾玉・管玉・丸玉・小玉・及び棗玉を出したが、其種類に依つて列舉すれば、

勾玉 硬玉製のもの三個、硝子製で紫色のもの五個、琥珀製なるは何れも破損して完全なるものは一箇も無き爲其數は確實ならざるも、少くとも五個を存せしことは知られる。何れも長さ十五耗内外のものである。

管玉 碧玉岩製。比較的小型で風化して其質の脆弱と爲れるものあり、長さ一五耗内外。

丸玉 硝子製。直径八耗内外で紫色を呈するを多とするが、空色を呈せるものが十顆程あつた。

小玉 硝子製。直径三・五耗内外で、紫色のものが大部分で少許の空色と緑色のものを交へて居た。

棗玉 琥珀製で完全なるは三個に過ぎざるも破損せるものより推せば十個程と思はれる。一般の棗玉に比しては高さ低く幅六・五耗高八耗程度のものである。

櫛 八本の竹串を重ね、其中央より彎曲せしめた堅長いもので所謂縦型結束式であり、長さ八・一五糎。此種の櫛の古墳から発見すること甚だ少く、しかも多くは纔に頂上の結束部を存するに過ぎなかつたが、尖端の齒の部分まで殆んど全部遺存するは保存状態完全に近いものと云へる。

鐵劍 埋藏中は完全なりしも、之を取出すに

當り數個に折損されたが、全長一・五三米、中莖の全長一二糎、劍身幅四糎。鞘の木質部及び柄の拵として絲卷の状態が尙ほ一部に残存して居り、貫抜孔は一個である。前述丸玉には劍身の略ぼ中央部に銹着せるものがあり、相連つて絲にて綴れる状態を呈し三十九粒が九行に爲つてゐる。

此の鐵劍の他に刀子及び鐵鏃の殘片が各一個を出土してゐる。

以上は概報を述べたに過ぎず、何れ此等の遺物遺蹟に關しては詳細に報告される筈であるから總てを其の機會に譲ることにする。

最後に本調査に當つて各方面より與へられた御好意、特に法政大學豫科當局、鹿島組工事關係者、並に土地所有者たる東横電車株式會社松浦支配人に深甚の謝意を表する（保坂三郎記）。